

2021 September

9
月号

春燈



安住敦の句

衣更へて巢鴨とげぬき地藏詣

『柿の木坂雑唱』昭和五十五年

豊島区巢鴨の中仙道沿いの街には「とげぬき地藏」で知られる高岩寺がある。本尊の延命地藏菩薩は、諸病に靈験があるとされ、多くの参拝者で賑わう。

安住敦先生は、お気に入りの白緋に着替えて出かけられ、どなたかの病を、本堂で、そして庭の地藏菩薩に水を掛けて祈願されていたのでしょうか。「衣更へて」が軽やかで美しく景を明るくし、先生の優しいお姿が目につかぶ一句です。

池上昌子

安住敦の句

鴉鳴いて第五日曜約束なし

『歴日抄』昭和四十年

昭和三十八年五月、万太郎の急逝により春燈主宰を継承した敦。俳人協会の理事も務めていた当時、毎週日曜は句会や会議など、過密なスケジュールであったに違いない。それ故に定例の予定がない第五日曜は貴重な安息日。鴉の鳴き声に安らぎつつ秋の一日を堪能した様子が窺われる。

敦は下五の字余りを得意としたが、前掲の句の字余りは緩やかに流れる余暇時間を感じさせ、ひと際効果的である。

近藤典啓

安立公彦



暮れ残る幣の白さの茅の輪かな

祭笛ふるさと今も山河あり

在りありと父の横顔まつり笛

青空の位置を違へず朴の花

送り梅雨熱海の山河暮れやらず (悼)

燈下集

○ 今井弘雄

空青し若葉のゆるる風の音

ひまはりや暑さそしらぬ顔をして

観客の誰もぬない蟬時雨

子ども等の唄つて帰る大夕焼

鳥海の嶺はるかなり稲の波

○ 片山博介

青蛙鳴けばいよいよ森蒼く

夏草や廃村を埋め墓うづめ

息ひそめ奈落の底にの蟻地獄

山盛りに匙おづおづとかき氷

船室の卓にラム酒とパナマ帽

○ 府川昭子

紫陽花の夜来るごとく変化して

明易や水の匂ひの朝の風

髪洗ふ明日ある事を疑はず

空模様を翻弄さるる梅雨の家事

更衣しても身の内軽からず

○ 瀬戸峰子

街騒を離れ高みに桐の花

桐の花一張一弛の琵琶床に

碧潭に青葉山影濃かりけり

艇庫脇漣に映え花茨

あめんぼう己が主張し水押さふ



○ 永島雅子

風纏ひ五月の土手を夫とゆく
庭に差す強き陽射しや夏めきぬ
ダイエツトうつかり忘れ更衣
宇治よりの今年も届く新茶かな
娘一家水羊羹と来りけり

○ 矢口笑子

吹き抜くる風青々と茅の輪立つ(諏訪神社五司)
青風絵馬をはみだす「勝」の文字
夏燕社殿の軒を憚らず
緑蔭に祀りて親し塞の神
霊水の千年越ゆる音涼し

○ 松山三千江

皆違ふ顔して律儀さくらんぼ
外灯の守宮に五指のちからかな
野外演奏会太り肉なるチェロ奏者
梅雨の町近隣の家解体す
ボス猫の引越してゆく梅雨最中

○ 篠原幸子

時の日ややたらに進む腕時計
父の日の父の写真を磨きけり
投函のひとつとき待たぬ夕立かな
保育園の菜園小さきトマト熟る
青くるみ見付けて背筋伸びにけり

○ 藤原若菜

懸命に今日をまはせり水澄し
あぢさぬや想定内の医師の言
これしきのこと驚かず梅雨の雷
風鈴や亡き父のこと猫のこと
釣忍袂に添ふる指白し

○ 大文字孝一

雲の峰見えぬ未来を信じけり
念ずれば叶ふ夢あり雲の峰
蛭や掟などなき恋の道
形代の薄き背中を撫でにけり
父の日の長生きせよと子の手紙

○ 和田絢子

六月や箆笥に掛くる空布巾
すれ違ふ人や六月の風を生む
青田波「きけわだつみの声」古び
万葉の岬や灼けて船ひとつ
繕はぬ心の日々や鱗雲

○ 神田恵琳

海なかの都を知らぬ夜光虫
慰霊の日忘れめやとぞ合掌す
竹酔日おとうと遠く尺八吹く
ふる里は植田明りの中や今
泉水に潤むや夏の月の影

○ 小山繁子

白壁を映す掘割花しやうぶ
水切りの石のきらめき夏燕
夕虹やをさなのつくる砂の山
父と子のけふの一局蚊遣香
青梅雨や思ひ出の夜のラ・カンパネラ

○ 小島昭夫

入梅や級友の訃が新聞に
妙高を背に一族の田植かな
外房やわが青春の青葉潮
ワクチンを二回接種の夜のビール
喜寿の日の妻と分け合ふメロンかな

○ 渡辺若菜

雨脚に傘の重たき桜桃忌
荒梅雨や駅に善意の傘数多
父眠るふるさと遠き草蚩
海峽の白き灯台雲の峰
青春の蹉跎遙かに雲の峰

○ 西岡啓子

格闘する書類一枚梅雨に入る
十葉の樹下にひろがるさゆれかな
男の子等の泥んこ遊び梅雨晴間
明易し一夜泊りの永平寺
石灰岩の白さ際立つ大夏野

○ 中村紀美子

くちなしの一花の香る夕べかな
水巴の匂くちずさみつ蚊遣香
色白の母のおもかげ合歡の花
印旛辺の古墳を飾る夏あざみ
葉桜の下金次郎像しづか

○ 浅木ノエ

風五月町の名となる大櫛
よく弾むバスの座席や谷若葉
ハミングのひろがつてゆく水芭蕉
生ビール呑みほすまでの黙かな
砂時計ほどの人生大夕焼

○ 懸林喜代次

梅雨の雷チエーンを垂らす耳飾り
緑蔭や伐れば崇ると云ふ大樹
盛装の嫁の真白き夏帽子
曝書すや荷風百閒万太郎
父の日や子と酌み交はすオールドパア

○ 豊谷ゆき江

跳べさうで跳べぬ川幅蛍の夜
目の端に動く気配や夜の蜘蛛
土砂降りの雨に疲れて濃あぢさゐ
遠雷におののく犬を膝に抱く
盲導犬と渡る歩道や大西日

○ 後藤眞由美

梅雨夕焼くれなゐの水脈曳きゆけり
待ち人の黒きレースのマスクかな
ワクチンを終へて涼しく挨拶す
口曲げて何を思案や守宮の子
梅雨明や糠星縫うて翼の灯

○ 川崎真樹子

紫陽花の乳房の憂さのごとき揺れ
履歴書に姓別欄なし虹の彩
ほつぽつと木漏れ日を吸ふ苔の花
蛍追ひかけて鼻緒の切れさうな
蛍追ふサハラ砂漠に星降つて

○ 木村梨花

いつの間に肩抱かれをり蛍の夜
アマリス嫌な人には横を向き
傘雨忌の庭のあぢさゐ白ばかり
雨つぶひとつ夕立の来る気配かな
亡き人を呼べば郭公声重ね

○ 河崎國代

はらからの闇より帰る蛍の夜
百寿までと乞はれその気や朱夏の夢
松園の美人揺らぐや青簾
短夜や運もたらするメルヘン靴 *シンドレラ*
咲き満てり足下あやふきアマリス

○ 溝越教子

何気なき言葉に勇氣夏来る
野ぼたんの今もまぶたに濃紫
花魁草母のおしろい懐かしや
洋館の古井戸守るやアカンサス
竹筒の灯りやさしや蛍狩

○ 上野進

撒水車外宮の朝は忙しげに
啞蟬と言ふ生涯へ羽化すすむ
天花粉心悲しくも尚長寿
突き出され命流るる心太
露けしや夢を反易して散歩

○ 齋藤晴夫

ひとしほの四句遅れの山桜
春雷の近づく人を待つ間にも
梅雨晴間松籟雨気を祓ひけり
白雨去る潔清めし烏城
涅槃より妻の便りか落し文

○ 石橋邦子

青蘆を渡る風あり敦の忌
胡麻咲かす今年かぎりの畑かな
青鬼灯の花咲く日なり猫逝けり
辣蕪を提げて来る子や通り雨
七月の空の青さや母の忌来

余言 安立公彦

夏至夕べその明るさの杯を手に

橘 正義

「夏至」、いい文字だ。読みも善い。私たちの住むこの北半球の地で、昼が最も長く、夜が最も短い日と言うことは周知の通り。今年の夏至は六月二十一日だった。

この句はしかし、そういう暦の背景を詠むだけのものではない。「夕べを残す」という言葉がある。「夜に入っても猶、夕方の趣を残す」という意味である。この句は、その「夕べ」に「夏至」が付く。中七の「その明るさの」の背景が、「夕べを残す」という微妙な時間の感覚と並立して、「杯を手に」に結ばれている。俳句の表現は奥が深い。読み過ぐすと、その句の趣も過ぎ去ってしまう。

青桐や自転車でゆく古本屋

鷹崎由未子

「青桐、自転車、古本屋」。言葉の取合せが善い。一句を口遊んでいると、若々しい感性が静かに立ち上つて来る思いがする。この中七は時間の短縮の故ではない。歩道に沿って青桐が街路樹として植えられている。夏は黄白色の五弁

の花が咲く。その歩道と並行して、今日に行く先の古本屋街があるのだ。「青桐や」の上五が、一句を善く整えている。「古本屋」には、遠い学生時代の思い出もある。古本屋が活きている。

日輪に午後の疲れや杏落つ

鈴木 直充

「日輪に午後の疲れ」が、読む人の心を打つ。初め疑惑に取り付かれ、しばしの思索の果てに、「午後の疲れ」が何となく行く手の道を開けて来る。

太陽系の中心を為す日輪、私たちはその太陽光の恵みを受けて、この地球という惑星に生を与えられているのだ。「午後の疲れ」は、その地球に住む人、そのものの疲れである。そういう宏大な時間、空間の中、今杏の落ちる姿を目前にする。「現実とは何か」を問う一句である。

出港の豪華客船青葉潮

林 紀夫

先般催された、第八回春燈神奈川支部紙上大会の秀句の一つ。「港が見える丘公園」に近い港湾に山下埠頭があり、大型客船の停泊する景を目にする。この句もその一つ。棧橋に碇泊する豪華客船。今日はその客船の出航日だ。大勢の船客、それを見送る人々の群れ。別れを交わす人びと

に、折しも出航のドラが鳴り響くのだ。この句を見ていると、そういう風景が確と目に浮かんで来るようだ。「出港の」が善く言い留めている。

一途てふ昔のありし夕端居

久保 久子

「一途」という言葉が、作者の「今」を善く包んでいる。「昔のありし」の懐旧は、その一途さの思いを、追懐のみの思いに留めない真実を帯びている。昔を回顧するほどの人生を歩いて来た人には、誰にも在ることである。

この句、そういう時を経て来た作者が、夏の夕べ縁側で涼を求めて端居をしている。夕ぐれの間を見ている内に、ふと、過ぎ来しむかしのことなどが思い出されて来るのだ。繊細な表現の中に、微動だにしない、一途さの光る句だ。

父の日や母とは長き子の電話

吉川 隆

この句を見て独り頷く人も多かるう。その人は「父」である。子にとつては、父も母も親である。しかしどの子も、父より母に馴染の思いが深い。それはまた、子を持つ親の思いとして同じである。

掲出句。今日は父の日。六月の第三日曜日だ。お子さんから掛かって来た電話を取り話す母、傍らに居る父には、その会話を吾子と分かる。しかし交替しない母。しかも今

日は父の日だ。私もこの句を見ながら、大きく頷いた。

涅槃より妻の便りか落し文

齋藤 晴夫

作者の夫人は逝去されて、いま涅槃に在る。作者は独り午後の散歩の途次だ。ふと道端に落ちている木の葉を見る。落し文だ。時鳥の落し文か、しかし作者は、その落し文の中身は、涅槃に在る妻の便りと、ひとり思うのだ。

そのひと時の心の弾みが、「涅槃より妻の便りか」に善く出ている。想像の澄んだ思いに、作者の亡き夫人への愛情が善く表れている。「落し文」という木の葉に包まれた幼虫への、先人の賢察を改めて思う。

葉桜のそよぎ抜け来る郵便車

山浦 紀子

近くの公園に咲く桜が、吹く風に天上を舞い散る風景から、はや三か月が過ぎた。落花の後は日をかざす葉桜の時期となり、一本の桜に移りゆく季節の美しさはみごとだ。

掲出句。一読気持が洗われるような清々しい思いになる。「葉桜のそよぎ」、「抜け来る郵便車」。景が鮮明である。風景のみでなく、そこを抜け来る「郵便車」という、生活の中の一景が出ているのが善い。葉桜という背景に和し、生き生きと写し出されているのは見事である。

当月集

安立 公彦選



○ 佐藤まさ子

雲の峰共に歩みし峠越え
あぢさゐの色に埋もるる駅舎かな
ほたるこい歌ふ子供の声近し
緋目高に故郷遠く思ひけり
帆を揚げて磯風受くるヨットかな

○ 農野憲一郎

刃研ぎ師の呼び声ひくき梅雨人かな
豆腐屋に朝刊抛る明易し
交番のきりりと若き夏帽子
郭公や無改札の駅降るる人
月涼し女房が先に湯をつかふ

○ 宮崎紗伎

青嵐両手泳がせ一輪車
噴水や葉袋をまぶしく持ち
濃紫陽花雫に色のなかりけり
雲の峰風紋動くとも見えず
亡き人へゆきつく話天の川

○ 山本泰人

色づきて梅の実あるを知りにけり
紫陽花の夕べ浄瑠璃ながれをり
鈴蘭灯ともれる帰路や美女柳
短夜の一片の雨や韻をふみ
茂りたる大樹に父を思ふ日や

○ 大谷満智子

夕焼空影絵の童話大好きで
石蔵の宿にくつろぎ桐の花
さ揺らぐや備前の壺の鉄線花
風のでて雨となるらし夕風鈴
空蟬や利那の意地の爪を立て

春燈の句

安立 公彦選



青りんご生まるる曾孫凛てふ名

広島 落久保万里

歩く事子に誘はるる梅雨晴間

青梅雨や見する人なく朝化粧

梅雨寒や眉顰むる顔父ゆづり

南天の花房白く日の暮るる

夏蛙昨日も今日も鳴き通す

立葵靡線跡に色競ふ

法難の碑文なぞるや夕蛩

愛知 後藤 大

納涼祭とは名ばかりや人少な
孫と見るかなたの虹の消ゆるまで

雲の峰一枚岩の忠魂碑

夏蝶の吾が後先や風の道

東京 遠藤 レイ

炎天下チャペルの中の静けさよ

即興の幼の童謡梅雨の月

木々の葉のゆるる窓辺や囁れる

初蝶やバス降りてより道連れに

花南天些細な事は忘れけり

母の日や母の遺影に語りかけ

ひたすら走る一意専心蟻の列

神奈川 神崎 孝子

精げたる米粒に似て花みかん
甘き香に虫集まるや花みかん
出囃子に単衣衿元きりりとし(五早落帽家)

朝戸繰る先づは見上ぐる合歡の花

神奈川 神崎 孝子

梅雨籠り地図を拵けて仮想旅
雨あがり紫陽花の鞠うつむきぬ
枇杷熟れて裏木戸あたり明るうす

堀の外落梅拾ふ朝まだき

神奈川 神崎 孝子

青山椒摘み取る五指に香の残る